

〔論 文〕

教育実習事前指導における高等学校での 授業観察の成果に関する検討

崎 濱 秀 行
祐 岡 武 志
秋 山 弥

I はじめに

本研究の目的は、教育実習事前指導における学校での授業観察により、どのような成果が得られたのかについて検討することである。特に、高等学校における教育実習を目前にした大学生が高等学校における授業観察を行った際、どのような点が役に立ったかに関して回答した事項の中身およびその構造を検討することを目的とする。

大学において、学生が教育実習に臨むにあたっては、教職科目および取得予定免許状に対応した各教科に関する専門科目の受講に加え、教育実習に係る事前・事後指導に係る科目の受講が必要となる。各々の科目においては、教員としての資質・能力を高める上で必要な事項が扱われるが、この中には教育実習に臨むにあたって必要な事項も含まれている。

これらに加え、大学によっては、教員養成プログラムの充実を図る目的で、教育実習（基本実習および併修/隣接校実習の双方を含む）に臨むにあたり、実習以前の学校教育現場への参与観察を行う機会が設けられている。これを教育実習に臨む学生から見ると、実習開始以前から何らかの形で学校教育現場との関わりを持つ機会が確保されていることになる。参与観察の形態は様々なものが考えられるが、たとえば授業観察もその一つと言えよう。

これから教育実習に臨む学生、特に、教育実

習を目前に控えた学生にとって、授業観察はどのような意味を持つのであろうか。この問いへの答えとなり得る事項が先行研究に見られる。たとえば三島(2008)は教師の力量形成に着目し、従来は授業実践力(実際に授業を行う力)が重視されてきたが、授業観察力も力量形成を図る上で重要な役割を担っていることを指摘した。高橋・野嶋(1987)は、授業観察能力と教授スキル習得との間に密接な関連があること、秋田・佐藤・岩川(1991)は、授業観察力と教師の熟達化との間に密接な関係があることを指摘した。

これらの指摘を踏まえると、授業観察を行うこと自体が教師としての力量形成、中でも授業を行うことに関する力量形成に大いに関連していると考えられる。特に、教育実習を目前に控えた学生にとっては、教育実習期間中における学習指導や学習指導関連事項に取り組むスキルを少しでも高める上で、また、これらの活動に取り組む上でのレディネスを形成する上でも、授業観察は重要な役割を果たすものと思われる。

それでは、授業観察に取り組むにあたり、学生はどのような点に着目して観察を行えば良いのであろうか。先行研究の中には、ワークシートの形で観察観点を示し、学生がそれらに基づいて観察する、という方法を取り入れたものが見られる(中山ら、2000)。しかしながら、中山らの場合、対象とされたのが小学校・中学校に

における理科に限定されており、対象時期も教育実習開始時から終了時までの教育実習期間中に限定されていた。また、高橋・野嶋の場合は、教育実習の事前学習におけるマイクロティーチングを対象としていることから、本研究で対象とした、教育実習直前の実際の授業観察とは観察時期や観察対象が異なっている。さらに、秋田らの場合は熟練教員と初任教員を対象としたことから、本研究の対象者とは異なりが見られる。

これらを踏まえると、教育実習事前指導における授業観察を対象とするのであれば、まずは基礎資料として、実際の授業観察を行った学生に対し、どのような事項を観察したのかについてたずね、その中身を検討することが必要になる。特に、教育実習を目前にした時期であることを考慮すると、観察して役立つ点をたずね、その中身について検討することが、次年度以降の授業観察の充実化を図る上で有益であると思われる。

これらの事項を踏まえ、本研究では、授業観察を行った大学生から得られた回答を基に、授業観察を行ってどのような点が役立つのかの中身について検討を加える。

II 方法および手続き

1. 対象者

近畿地方の大学4年生38名(男性28名、女性10名、平均年齢21.2歳)。調査実施時期は2017年4月～2019年5月であった。

2. 材料

自由記述質問紙を使用した。中身は(1)授業観察の記録および(2)高等学校の授業を観察してどのような点が役立つかに関する記述(参加者1名あたり3点記述)を行うもので構成されていたが、本研究では(2)のみを分析・検討対象とした。

3. 手続き

本研究に係る調査実施にあたり、まずは授業観察直前の事前指導において、当日に配布する自由記述質問紙と同じ書式の用紙を配布した。そして、授業観察当日に自由記述質問紙を配布すること、中身を記載した上で質問紙を後日提出することを求めた。その際、「(2)高等学校の授業を参観してどのような点が役立つかに関する記述」部分を学術研究のためのデータとして使用すること、使用する場合、個人が特定されない形をとることを述べた。その上で、データとしての使用を希望しない場合、その旨を申し出ること、申し出をしても関連授業の成績には一切影響を与えないことについても説明を加えた。これらの事項を行った上で、授業観察当日、質問紙配布と(2)の部分に係る再度の説明を、質問紙回収日に、(2)の部分に係る再度の説明を行った。しかしながら、参加者からの申し出は特に見られなかったことから、本研究では、38名のすべての回答を分析対象とした。

なお、本研究の対象となった授業観察は教育実習に係る事前指導の一環として行われているものであり、本稿の全ての筆者がかかわっている。観察に際しては、各年の4月下旬、高等学校において50分の授業2時間(1時間は50分)の枠内で行われ、1時間(50分)あたり2クラスの授業を観ることを学生に求めた。ただし、観察する授業の教科・科目・学年・クラスは個々によって異なっていた。

III 結果

得られた結果について、Trustia Ver4.0を用いて分析を行った。授業観察において役立つ点に関する記述は全部で112個得られた。1文書あたりの平均語句数は11語(最小1語、最大49語)、1文書あたりの平均文字数は18文字(最小2文字、最大75文字)であった。これらの記述について、まずは当システムが有するCSV出力機能によりCSV形式で出力した上で、データベースを作成した。そして、データベースに

基づいて、統計情報の算出、主題分類の表示を行った。以下、それぞれの結果について検討を加えた。

1. 統計情報に関する検討

本研究の目的は、教育実習を目前にした大学生が高等学校で授業観察を行った際、どのような点が役立ったのかを検討することにある。そのため、まず「どのような点」にあたる部分に関する情報を得る必要があることから、名詞に係る情報（本研究の場合、名詞句）が必要不可欠である。また、名詞（句）がどのようなであったかを知るためには、各名詞句とどのような形容詞（句）・動詞（句）が関連しあっているのかに関する情報を得ることも重要である。このことから、統計情報については、以下のように、出現した名詞句に関する検討、名詞句一形容詞句との係り受けに関する検討、名詞句一動詞句との係り受けに関する検討を行った。

1) 出現した名詞句に関する検討

まず、文書中に含まれる名詞句について、出現頻度を算出した。名詞句は全部で324個見られたが、このうち、出現頻度数の上位3語を挙げると、「生徒（頻度47）」「授業（頻度19）」「板書（頻度17）」であった。そこで、各名詞句について、どのような記述が見られたのかを分析した。なお、「生徒が授業内容を～（以下略）」のように、一つの記述中に検討対象の名詞句が複数出現するものが10個（「生徒」・「授業」の2つが出現するものが5個、「生徒」・「板書」の2つが出現するものが4個、「授業」「板書」の2つが出現するものが1個）見られたが、これらの記述については、各々の名詞句での分析対象とした。そのため、同じ記述が複数の名詞句において分析対象となっている場合がある。

(1) 「生徒」に関する記述

生徒に関しては計47個の名詞句が見られたが、記述事項をさらに分類したところ、「生徒の学習活動」に係るものが34個（「生徒」が2回含

まれていた記述が1個見られたことから、記述数自体は33個）、「生徒への対応」に関するものが11個、「生徒の様相」に関するものが2個含まれた。これらの3つのサブカテゴリーについては、最初に第一筆者が各記述のカテゴリー分類および各下位カテゴリーの命名を行った。それを受け、第二筆者および第三筆者が分類の妥当性およびカテゴリー名の検討を行った。筆者間で見解の相違が生じた箇所については、協議の上、修正等を行った。以下、各下位カテゴリーについて検討を加えた（各カテゴリー中に含まれる項目は表1参照）。

表1 「生徒」に関する記述

生徒の学習活動 (34個)

グループワークはこまめに取り入れる（生徒をあきさせない）
 生徒に起立した状態で、単語発音のアクティビティをする（姿勢を正し、声を出させることで新単語の抵抗を軽減）
 ペア活動を積極的に取り入れる（生徒の得意不得意を考慮して英語の実践を図る）
 生徒への発問
 生徒が退屈する授業の例
 先生から生徒への発問
 生徒が授業内容を理解しているか確認するために、授業のあいだあいだで問題形式で問い掛けることや、問い掛けた生徒に対する些細な一言。
 生徒をランダムにあて寝ないようにする
 生徒のイメージがしやすいように具体例を出すこと。
 生徒を飽きさせない工夫
 生徒を惹き込むトーク術の仕方
 どの先生も、声が大きく、聴き取りやすかったです。クラスの生徒全員がきちんと聴き取れるように、大きな声ではっきり話すことの大切さを学ぶことができました。
 一方的に話すだけでなく、生徒に問いかけをし、考えさせるということも大事であると感じました。
 生徒を指名発表させる際、答えを導き出せる工夫をしていた。
 黒板の字はキレイだと生徒も板書を積極的にする。
 一方的ではなく生徒と一緒に授業を作る。
 板書と生徒をみるタイミング
 具体例を出すことで生徒がイメージしやすくなっていた。
 生徒に疲れを感じさせない授業進行
 スムーズな授業をするために、生徒が答えやすい質問
 アクティブラーニングの際は生徒の発言数が多い。

生徒への発問の仕方
 先生が話すだけでなく、その話題、問題を生徒同士で考える時間を作る。
 生徒に名指しをする。
 生徒への目配り。
 板書の際、完全に生徒に背を向けるのではなく、生徒が見える体勢で板書をする、といった点
 期間巡視を行ない生徒の問題を解くスピードを見るところといった点。
 生徒への発問の仕方
 生徒の理解度の確認
 発問の仕方(例をだし、生徒にわかりやすく)
 ユーモアあふれる授業が生徒が興味をもつ。
 板書の書き方。(生徒が書き終えるまで待ち、重要なものには色をつかう)
 生徒への質問、発問のタイミング

生徒への対応 (11 個)

机間巡視をする際生徒に声かけ(寝ている生徒)
 生徒とのコミュニケーションが大事と分かった。
 生徒との距離感の把握
 生徒とのコミュニケーションの取り方
 生徒への気づかい
 先生と生徒の距離感(コミュニケーション)
 生徒とのコミュニケーション方法
 生徒の居眠りや雑談への対応
 生徒・学級を知り、その時必要な声かけをする。
 寝ている生徒を起こす際、先生が起こすのではなく、生徒同士で起こしあうといった点
 生徒への接し方。

生徒の様相 (2 個)

学年やクラスで生徒の様子が全く違うことがわかった
 生徒の態度

「生徒の学習活動」に関するものとしては、「グループワークはこまめに取り入れる(生徒をあきさせない)」「生徒が授業内容を理解しているか確認するために、授業のあいだあいだで問題形式で問い掛けることや、問い掛けた生徒に対する些細な一言。」「どの先生も、声が大きく、聴き取りやすかったです。クラスの生徒全員がきちんと聴き取れるように、大きな声ではっきり話すことの大切さを学ぶことができました。」「黒板の字はキレイだと生徒も板書を積極的にする。」「具体例を出すことで生徒がイメージしやすくなっていた。」などの記述が見られた。内容としては学習指導法に関するもの、評価に関

するもの、授業を行う際の技術的側面に関するもの、記憶の定着を図ることに関するものなど、授業を構成する様々な側面に関する事項が含まれていた。「生徒への対応」については、「机間巡視をする際生徒に声かけ(寝ている生徒)」「生徒とのコミュニケーションが大事と分かった。」など、生徒とのやりとりに係る事項が含まれた。これら以外にも、「生徒の様相」として、「学年やクラスで生徒の様子が全く違うことがわかった」といった記述が含まれていた。

(2)「授業」に関する記述

授業に関しては19個の名詞句が得られた。いずれも、1記述につき、「授業」は1回のみ含まれていたことから、記述数も計19であった。中身に着目すると、「授業にメリハリをつけること」「授業は硬いものにさせない雰囲気作り方」「授業をするまでの先生の準備の大切さを感じた。」といった、授業の進め方、授業の様子(雰囲気)等の様々な内容が含まれていた(各項目の記述内容は表2参照)。

表2 「授業」に関する記述

授業にメリハリをつけること
 学年に合わせた授業の流れ。
 授業は硬いものにさせない雰囲気作り方
 授業をするまでの先生の準備の大切さを感じた。
 授業をするまでに先生がどれだけ準備をしたのかが分かった。
 授業は基本的に楽しく笑顔で行う。
 授業の流れを改めてつかむことができた。
 授業を行う上で先生の準備力を見る事が出来た。
 授業の速度
 授業の進め方。
 能動的に授業展開
 授業は楽しくハキハキと行う。
 授業に入るタイミング
 板書の取り方や、図の利用で授業の理解度を高める。
 生徒が退屈する授業の例
 生徒が授業内容を理解しているか確認するために、授業のあいだあいだで問題形式で問い掛けることや、問い掛けた生徒に対する些細な一言。
 一方的ではなく生徒と一緒に授業を作る。
 生徒に疲れを感じさせない授業進行
 スムーズな授業をするために、生徒が答えやすい質問

(3)「板書」に関する記述

「板書」については17個の名詞句が得られた。いずれも、1記述につき、「板書」は1回のみ含まれていたことから、記述数も計17であった。中身に着目すると、「板書」とだけ書かれた記述も見られたが、「板書の取り方や、図の利用で授業の理解度を高める。」「板書で使用する色は黄色をメインとする」「板書をきれいに書かないといけない。」など、板書を行うのに係る具体的な事項に言及したのも含まれていた(各項目の記述内容は表3参照)。

表3 「板書」に関する記述

板書の取り方や、図の利用で授業の理解度を高める。
板書の工夫
板書
板書で使用する色は黄色をメインとする
板書をきれいに書かないといけない。
板書構成をマネしようと思わせる整理された書き方
板書の際、黒板の書き方や色の使い分け方
板書の書き方や色の使い分け方を学ぶことができた。
板書の仕方
板書の使い方
板書を色を使って書く
板書のやり方
板書
黒板の字はキレイだと生徒も板書を積極的にする。
板書と生徒をみるタイミング
板書の際、完全に生徒に背を向けるのではなく、生徒が見える体勢で板書をする、といった点
板書の書き方。(生徒が書き終えるまで待ち、重要なものには色をつかう)

2) 名詞句—形容詞句との係り受けに関する検討

名詞句と形容詞句との係り受けについて検討を加えた。当該の組み合わせの出現頻度が1以上見られたものは全部で46個あったが、このうち、「授業—楽しい」、「準備—大切」「声—大きい」の頻度がそれぞれ2であった。それ以外のものについてはそれぞれ、頻度が1にとどまった。しかしながら、同じ名詞句に対してどのような形容詞句が連動しているかを見ると、「授業」に対しては5種類(頻度6)の形容詞句が、「生徒」に対しては9種類(頻度9)の形容詞が、

「声」に対しては2種類(頻度3)の形容詞句が連動していた。そこで、各々について以下に記述する。

第1に、「授業」について検討する。授業については、「授業—楽しい(頻度2)」以外にも、「授業—退屈」「授業—スムーズ」「授業—ハキハキ」「授業—硬い」(いずれも頻度1)といった係り受けが見られた。いずれにおいても、授業がスムーズに行われる上で重要であると考えられる事項に関する記述であった(記述内容は表4参照)。

表4 「授業」に関する名詞句—形容詞句係り受けの記述

授業は基本的に楽しく笑顔で行う。
授業は楽しくハキハキと行う。
生徒が退屈する授業の例
スムーズな授業をするために、生徒が答えやすい質問
授業は硬いものにさせない雰囲気作り方

第2に、「生徒」について検討する。生徒については、「生徒—多い」「生徒—大事」「生徒—一方的でない」「生徒—些細」「生徒—退屈」「生徒—答えやすい」「生徒—わかりやすい」「生徒—イメージした」「生徒—完全」という係り受けが見られた(いずれも頻度1)。いずれにおいても、生徒が授業に取り組みやすいようにするために必要な事項に関する記述であった(記述内容は表5参照)。

表5 「生徒」に関する名詞句—形容詞句係り受けの記述

アクティブラーニングの際は生徒の発言数が多い。
生徒とのコミュニケーションが大事と分かった。
一方的に話すだけでなく、生徒に問いかけをし、考えさせるということも大事であると感じました。
生徒が授業内容を理解しているか確認するために、授業のあいだあいだで問題形式で問い掛けることや、問い掛けた生徒に対する些細な一言。
生徒が退屈する授業の例
スムーズな授業をするために、生徒が答えやすい質問
発問の仕方(例をだし、生徒にわかりやすく)
生徒のイメージがしやすいように具体例を出すこと。
板書の際、完全に生徒に背を向けるのではなく、生徒が見える体勢で板書をする、といった点

第3に、「声」について検討する。「声」については、「声—大きい」「声—必要」「声—かなり」と、いずれも授業において大きな声を出すことの必要性を記述したものであった(記述内容は表6参照)。

表6 「声」に関する名詞句—形容詞句係り受けの記述

どの先生も、声が大きく、聴き取りやすかったです。クラスの生徒全員がきちんと聴き取れるように、大きな声ではっきり話すことの大切さを学ぶことができました。かなりの声の大きさが必要なことがわかった

3) 名詞句と動詞句との係り受けに関する検討

今度は名詞句と動詞句との係り受けについて検討を加えた。両者の係り受けについては全部で123個が抽出された。このうち、「具体例—出す」「生徒—寝る」「生徒—確認」がそれぞれ頻度2であり、その他は頻度1であった。

次に、同じ名詞句に対してどのような動詞句が連動しているかを検討するため、名詞句ごとに数を数えたところ、「生徒」については頻度17、「授業」については頻度8、「板書」については頻度6であった。そこで、それぞれにどのような語との係り受けが見られたのか、その頻度はいくつであったのか、また、どのような内容であったのかについて記述する。

第1に、「生徒」について記述する。生徒については、「生徒—寝る」「生徒—確認」がそれぞれ頻度2、「生徒—する」「生徒—解く」「生徒—行う」「生徒—書く」「生徒—みる」「生徒—考慮」「生徒—問いかける」「生徒—飽きない」「生徒—違う」「生徒—起こす」「生徒—見える」「生徒—惹く」「生徒—知る」「生徒—理解」「生徒—あきない」がそれぞれ頻度1であった。中身については、授業に焦点を当てたもの、生徒対応に焦点を当てたと思われるものがみられるが、いずれの場合も、授業を円滑に、かつ、生徒にとって実りのあるものにするために必要だと思われる事項に関して記述がなされていた(記述内容

は表7参照)。

表7 「生徒」に関する名詞句—動詞句係り受けの記述

生徒をランダムにあて寝ないようにする
寝ている生徒を起こす際、先生が起こすのではなく、生徒同士で起こしあうといった点
生徒が授業内容を理解しているか確認するために、授業のあいだあいだで問題形式で問い掛けることや、問い掛けた生徒に対する些細な一言。
生徒の理解度の確認
生徒に起立した状態で、単語発音のアクティビティをする(姿勢を正し、声を出させることで新単語の抵抗を軽減)
机間巡視を行ない生徒の問題を解くスピードを見るといった点。
板書の際、完全に生徒に背を向けるのではなく、生徒が見える体勢で板書をする、といった点
板書と生徒をみるタイミング
ペア活動を積極的に取り入れる(生徒の得意不得意を考慮して英語の実践を図る)
一方的に話すだけでなく、生徒に問いかけをし、考えさせるということも大事であると感じました。
生徒を飽きさせない工夫
学年やクラスで生徒の様子が全く違うことがわかった
生徒を惹き込むトーク術の仕方
生徒・学級を知り、その時必要な声かけをする。
グループワークはこまめに取り入れる(生徒をあきさせない)

第2に、「授業」について記述する。授業については、「授業—行う」「授業—つける」「授業—高める」「授業—つかむ」「授業—合わせる」「授業—作る」「授業—入る」「授業—あふれる」がいずれも頻度1であった(記述内容は表8参照)。

表8 「授業」に関する名詞句—動詞句係り受けの記述

授業を行う上で先生の準備力を見る事が出来た。
授業にメリハリをつけること
板書の取り方や、図の利用で授業の理解度を高める。
授業の流れを改めてつかむことができた。
学年に合わせた授業の流れ。
一方的ではなく生徒と一緒に授業を作る。
授業に入るタイミング
ユーモアあふれる授業が生徒が興味をもつ。

第3に、「板書」について説明する。「板書」については、「板書一書く」「板書一する」「板書一みる」「板書一使用」「板書一使う」「板書一書かない」のいずれれもが頻度1であった(記述内容は表9参照)。

表9 「板書」に関する名詞句一動詞句係り受けの記述

板書の書き方。(生徒が書き終えるまで待ち、重要なものには色をつかう)
 板書で使用する色は黄色をメインとする
 板書と生徒をみるタイミング
 板書の使い方
 板書をきれいに書かないといけない。

2. 主題分類に関する検討

図1は、主題分類によって得られたデンドログラムである。崎濱(2013)が述べているように、主題分類では、内容が類似している文書同士をいくつかのグループに分類することができる。各分類の特徴を示す「主題」となる語句は、各グループの中から最も特徴的な言葉を自動的に拾い出した上で決定される。また、デンドログラム表示の中のツリーにより、各主題がどのような関係でグループ化されるかを把握することができる。ツリー上では、近くに並んでいる分類ほど関連性が高く、遠く離れているほど関連性が低いと判断することができる。本研究においては計11の分類が得られたが、デンドログラム表示におけるツリー、信頼度、類似度等を

考慮し、4つのクラスターとして以下の解釈を行った。

第1クラスターは、「発問」「仕方」「生徒」で構成される「生徒の学習活動に関わる事項」クラスターである。代表語句として、「発問/生徒/質問/具体例」などが含まれ、語句を含む記述としては、生徒に発問をすること、生徒が答えやすい質問をすること、生徒がイメージしやすいように具体例を出すことなどに関するもので構成されていたが、いずれの記述も、授業中の生徒の学習活動に関わる事項であった。

第2クラスターは、「単語」「声」「巡視」で構成される「教師の指導上の留意点に関わる事項」クラスターである。代表語句として、「単語/豆知識/声かけ/巡視」といった語句が含まれ、語句を含む記述としては、単語の成り立ちなどの豆知識を持っている(授業で伝える)こと、生徒・学級を知ってその時必要な声かけをすること、机間巡視をすることなどに関するものが含まれた。内容としては、授業中における教師の動きに関わるもの、授業を行うにあたって必要なことがらに関わるものなどが含まれているが、いずれの記述も、授業における教師の指導上の留意点に関わる事項であった。

第3クラスターは、「書」「板書」で構成される、「板書に関わる事項」クラスターである。代表語句としては「書き方/使い方/使い分け/色」といった語句が含まれ、語句を含む記述としては、板書構成をマネしようと思わせる整理され

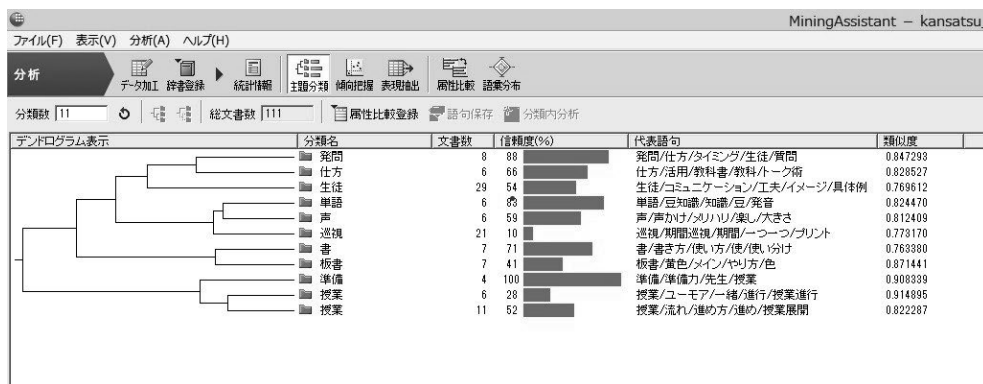


図1 授業観察にて役立った点に関する記述の主題分類

た書き方に関するもの、板書の使い方に関するもの、板書の際の黒板の書き方や色の使い分け方に関するものなどが含まれたが、いずれの記述も、板書に関わる事項であった。

第4クラスターは、「準備」「授業」で構成される、「授業構成に関わる事項」クラスターである。代表語句としては「授業/授業進行/流れ/進め方」といった語句が含まれ、語句を含む記述としては、授業の速度に関するもの、生徒に疲れを感じさせない授業進行に関するもの、学年に合わせた授業の流れに関するもの、授業の進め方に関するものなどが含まれたが、いずれの記述も、授業構成に関わる事項であった。

IV 考察

得られた結果を基にして、以下に考察を加える。

まず、名詞句の出現頻度を見ると、「生徒」「授業」「板書」の順であった。出現頻度は各々異なり、最も多かった「生徒」でも、名詞句全体の15%程度にとどまった。しかしながら、一か所でも「生徒」を含む記述を行った参加者が38名中33名存在した。「生徒」を含む記述を行った参加者(33名)と行わなかった参加者(5名)との人数の偏りを検討するため、二項検定を行ったところ、 $p=0.00$ となり、「生徒」を含む記述をした参加者の人数が有意に多かった。このことから、授業を行うにあたって、自身が授業をするという点だけでなく、それを受ける生徒の様子についても関心を持っている学生が多いことが伺える。また、「授業」については、授業の準備という、目の前で展開されている授業を支える部分(眼前には見られない部分)、「板書」については、書く時の注意点に関わる部分にも着目していたことが考えられる。

次に、名詞句—形容詞句、名詞句—動詞句の係り受けについて検討したところ、「授業—スムーズ」「生徒—答えやすい」「生徒—わかりやすい」「生徒—確認」「生徒—考慮」といった組み合わせが見られた。内容は様々ではあるもの

の、いずれの事項でも、授業をスムーズに進める上で重要だと思われることがらに関する記述がなされていることが考えられる。

その次に、主題分類においては、「生徒の学習活動に関わる事項」「教師の指導上の留意点に関わる事項」「板書に関わる事項」「授業構成に関わる事項」の4クラスターを抽出した。内容としては、授業全体の運営に関わるものから、授業における各側面に関わるものまで含まれてはいたが、主題分析においても、係り受けに関する分析同様、授業をスムーズに進める上で重要だと思われる各要因に関する記述がなされていることが考えられる。その中で、「板書」クラスターが独立した一つのクラスターとして抽出された。一つでも板書のことに触れた記述を行った参加者の数を見ても、38名中17名存在したことから、観察の一つのポイントとして板書に注目していた参加者が存在したことが伺える。

以上の4つのクラスターについては、内容は様々ではあるものの、いずれの事項でも、授業をスムーズに進める上で重要だと思われることがらに関する記述がなされていることが考えられる。また、主題分類において4つのクラスターが抽出されたことから、参加者全体として、授業そのものを複数の面からとらえていたことが伺える。

名詞句に関する分析および主題分類においてこれらの結果や示唆が得られた理由としては、授業観察を行った時期の影響が考えられる。本研究に係る授業観察は4年生の4月下旬に行われていた。参加者の殆どは5月または6月に教育実習に臨んだことから、授業観察は教育実習直前に行われたと判断でき、参加者自身の中で、実際に授業を行うための動機づけが高まっていたことが考えられる。そのような状況の中で、自身が授業を行う場合にどのような点に気を付ける必要があるかをはじめ、自身の行うであろう授業を想定しつつ、観察を行っていたことが考えられる。

V 全体のまとめ

本研究では、教職課程履修学生を対象として、高等学校における教育実習を目前にした学生が高等学校における授業観察を行った際、どのような点が役に立ったかに関して回答した事項の中身およびその構造について検討を加えた。その結果、名詞句の出現頻度の上位3語は「生徒」「授業」「板書」であった。また、主題分類により、回答の中身は「生徒の学習活動に関わる事項」「教師の指導上の留意点に関わる事項」「板書に関わる事項」「授業構成に関わる事項」の4つのクラスターに分類された。いずれも、授業をスムーズに運営する上で重要だと思われることがらで構成されていた。また、参加者全体として、授業を複数の面からとらえていたことが示唆された。

このように、高等学校教員免許状取得予定者を対象とした教育実習直前期の高等学校での授業観察の様相は今まであまり詳細にはとらえられていなかったが、本研究における検討により、観察の視点の多面性が見出されたことは、今後の教員養成プログラム充実を図る上で意義があるものと思われる。

しかしながら、今回の調査（授業観察）は、教育実習直前の1回のみを対象としたものであっ

た。そのため、教育実習に臨む前（たとえば1・2年前）、教育実習直後等にも同様の調査を行い、観察視点の変化を検討するなど、教師のキャリア発達という観点からの検討を行うことも今後必要である。また、観察視点の変化の様相を踏まえた上で、授業観察の視点の育成のあり方を検討することについても今後の検討課題となろう。

参考文献

- 秋田喜代美・佐藤学・岩川直樹(1991) 教師の授業に関する実践的知識の成長—熟練教師と初任教師の比較検討— 発達心理学研究, 2: 88-98。
- 高橋哲郎・野嶋栄一郎(1987) 教育実習事前学習プログラムの開発とマイクロティーチングの改善に関する研究 日本教育工学雑誌, 11: 57-70。
- 中山迅・隅田学・阪元聡・宮本伸二郎・山根研一・国生尚・隈元修一(2000) 教育実習生の理科授業観察能力向上を図るワークシートの開発 宮崎大学教育文化学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 7: 91-101。
- 三島知剛(2008) 教育実習生の実習前後の授業観察力の変容—授業・教師・子どもイメージの関連による検討— 教育心理学研究, 56: 341-352。
- 崎濱秀行(2013) 中学生は、日本人教師による英語科ティームティーチングをどう捉えているか? 阪南論集人文・自然科学編, 49(1): 19-23。

(2019年7月12日掲載決定)

